

西行とダンテ、ペトラルカの比較を、1. 旅、2. 歌枕と叙景、3. 自己編集と伝説的様式化、4. 心身分離のテーマほか、4つの観点から試みたいと思います。

まずは、「1. 旅」から。来年生誕900周年を迎える西行がいかに旅を愛したかについて、ここでは詳しく述べる必要はないでしょう。ダンテは、1290年代後半から積極的に都市国家フィレンツェの政治に深く関与するようになり、一時は行政の最高職にも昇りつめました。ところが、激化するフィレンツェ内部の対立抗争に巻き込まれて、1301年特使としてローマ教皇庁に派遣された頃から、亡くなる1321年まで約20年間、放浪の旅を強いられました。同じ政争が原因でフィレンツェを追われたのがペトラルカの父親でした。詩人ペトラルカは、父の亡命先アレッツォ（トスカーナ地方）で生まれました。幼くして、当時教皇庁のあった南仏アヴィニョンに移りましたが、大学教育の一端はイタリア（ボローニャ）で受けています。南仏にもどると、教皇庁に入り込み、そこで重きをなしていた（ローマ出身の）名門コロナ家と深く結びつくこととなります。ペトラルカはコロナ家に仕える聖職者となりますが、アヴィニョン近郊に見出した安らぎの地ヴォクリューズと教皇庁の間の行き来を繰り返していたのではなく、高速な交通手段が未発達であった当時としては大旅行家であり、ドイツ、ベルギー、フランス、スイス、イタリアの各地を訪れ、頻りに居場所を変えました。その旅の多くは、交易や巡礼のために行われたものではなく、好奇心のためのものでした。

西行、ダンテ、ペトラルカは、以上のとおり、いずれも頻りに旅をした詩人でしたが、その経験は彼らの作品の中にどのような形で反映しているのでしょうか。この点について、「2. 歌枕と叙景」という視点から考えてみたいと思います。まず、西行については、地名が歌の中に頻りに織り込まれていることが注意を引きます。調査を簡略にするために、観察を『御裳濯河歌合』および『宮河歌合』に限ると、『御裳濯河歌合』では全72首中18首、『宮河歌合』では全72首中14首が地名を含んでおります。2つの自歌合を通じて、吉野（ないしは吉野山）がもっとも頻出する地名であり、西行がいかに桜を愛したかが窺われます。

ハンドアウトの1) をご覧ください。「風さえて寄すればやがて氷つゝ返る波なき志賀の唐崎」。この作品は、地名を含む西行の歌のうち、私のもっとも気に入っているものの1つです。唐崎の冬のめずらしい情景がみごとに描かれており、旅心を誘われます。歌枕において詠まれた作品は、その地を訪れた時の印象をすばやく捉え、記録にとどめるという側面と同時に、先立って詠まれた歌との「テキスト相互的」(intertextual)な関係をもっています。2) から6) に挙げた歌は、そのことをわかりやすく例証してくれるでしょう。西行が能因の旅と歌を明確に意識していたことは、『山家集』に記された詞書からも明らかであり、2) から4) は「テキスト相互的」関係の下に読まれるべきでしょう。とりわけ注目に値するのは、5) 「津の国の難波の春は夢なれや蘆の枯葉に風わたる也」だと思えます。西行は眼前の「蘆の枯葉」のみならず、不在の「難波の春」にも言及しつつ、能因の先行作品、6) に掲げた「心あらむ人に見せばや津の国の難波わたりの春の景色を」を脳裏に浮かべています。また、読者の記憶に呼び覚まそうとしているようです。このように、歌人は目の前のありのままの風景に向かい合っているだけでなく、先行テキストに描きこまれた風景を前にしているのであって、「叙景する」、すなわち「風景を詠む」という作業は、高度に知的な文学的遊戯という側面をも有しています。

西行と風景の関係がこのようなものであったとすれば、ダンテやペトラルカの場合はどうだったのでしょうか。観察の対象を『神曲』と『カンツォニエーレ』に限って、考えてみましょう。『神曲』には、多くの地名が挙げられており、その場所は克明に描写されております。ハンドアウト7) から10) はその例となる、いくつかの箇所です。この世の風景は、あの

世を旅する主人公「私」が訪れた場所の説明として利用されたり、「私」が会える霊たちの記憶にとどまり、そのアイデンティティと密接に結びついた部分として言及されています。それらの風景は、自然のものであれ都市のものであれ、きわめて微細に描かれているために、読者はそこを実際に訪ねてみたいという気持ちになります。私もそうした者のひとりですが、アクセスが比較的容易なのは8)に掲げたガリゼンダでありましょう。「ガリゼンダの上を雲が流れてゆく時に、斜面の下から仰ぎみていると、塔が自分の方に傾いてくる錯覚に陥るものだ。巨人アンタイオスは、まさにそのような感覚を私に味わわせることになった」。ボローニャの街のまさに中心に位置するこの斜塔を訪ねてみると、ダンテの当該一節が石に刻まれています。いま大切なのは、ダンテの一節とそれを刻んだ石のお蔭で、この斜塔が歌枕になっただろうか、と問うことでしょう。私には、そのようには思われません。ペトラルカ『カンツォニエーレ』になると、歌枕になりうるような地名自体にほとんど出会いません。ハンドアウト11)にあるように、地名が皆無というわけではありませんが、そこに挙げられている「ティグリス川」「ユーフラテス川」は「東」を示すために用いられているであって、2つの川が同じ水源から流れ出すことへの言及は、むしろ地理の知識であって、風景の描写とは異なっています。ハンドアウト12)に引いたソネットは、『カンツォニエーレ』中もっとも有名な作品の1つですが、孤独なもの思いに耽りたいと願う恋人の心理をみごとに描き出しています。ソネットは、13)に掲げた西行の歌、「遙かなる岩のはざまにひとりゐて人目思はで物思はばや」に相通じるものをもっています。しかし、唐崎の歌と比べると、ペトラルカのソネットでは、詩人の内面の秘密を分かち合うことになる風景は、下線部にあるように、「山も斜面も川も森も」とだけあるだけで、ほとんど個別化されておりません。この「山も斜面も川も森も」は「人目から遠く離れた処」という抽象的な風景を意味するのみです。

ペトラルカがいかなる意識をもって風景に対していたのか。この点を深めてゆく上で興味深いのが、有名な『親近書簡集』第4巻第1書簡でありましょう。南フランスのヴァントゥー山に登った時の体験を語ったこの手紙は、その解釈をめぐるさまざまな議論が今も繰り返されています。それは、ハンドアウト14)に掲げた抜粋からも明らかのように、好奇心を唯一の動機とした登山、つまり観光目的の登山が、山頂においてアウグスティヌスを繙いたことによって、人間の内面の発見へと大きく方向転換するからです。私個人はといえば、ペトラルカは（そしてダンテも）、風景を風景自体において見て味わうという意識をまだ十分にもっていないかったという見解に傾いております。

風景に向かう意識はまた、関係するジャンルによっても大いに影響されるでしょう。『神曲』のように叙事的なタイプの作品にあっては、たとえあの世の風景や人物であれ、それを明確に読者に伝えねばならず、その必要がこの世の風景との克明な比較や地名の明示につらなると考えられます。他方、『カンツォニエーレ』のような叙情的なタイプの作品では、内面の表白が重要さを増す分だけ、外の風景への依存が弱まり、その輪郭が曖昧になるのでしょう。しかし、ダンテにとってもペトラルカにとっても、叙景は十分確立されたジャンルにはなっていないように思われます。風景をある人物や出来事の背景としてではなく、それ自体観察に値するものとする意識がいつ頃どのようにして確立するのか。言い換えるならば、「風景画」はいつ頃どのようにして確立するのか。イタリア文学（ひいては西洋近代文学）における叙景というジャンルの確立は、美術史研究と手を取りながら、探求してゆくべき課題でありましょう。叙景がジャンルとして確立し伝統化すると、今度は叙景詩の間に「テキスト相互的」な関係が成立するようになります。

『カンツォニエーレ』自体は歌枕を生み出す力をほとんど宿しておりませんが、ヴェネト地方のアルクワ（パドヴァ近郊）にある、ペトラルカの終の住処となった家は擬似歌枕的な役割を少しだけ果たすことになりました。ハンドアウト15)に掲げた『カンツォニエーレ』234番に刺激されて、アルフィエーリがアルクワを訪れて16)に引いたソネットを詠みます。すると、そのソネットを引用しながら、今度はフォスコロが17)にあるように、主人公がア

ルクワを訪れる場面を小説の中に描きます。下線を施しておきましたので十分明らかでしょうが、15)と16)、16)と17)は密接な「テキスト相互性」によって結ばれております。ただ、注意しておかねばならないことが2点あります。まずは、アルフィエーリおよびフォスコロの関心を惹いたのはむしろ「ペトラルカの家」であって、アルクワという土地ではないということ。次に、アルフィエーリもフォスコロも、中央集権的な国民国家としてのイタリアの確立が模索された時代の作家であること。中央集権国家という政治の枠組だけでは、ほんとうの国民はできません。それを創り出すためには、分かち合われる文化的なアイデンティティを植えて育てることが不可欠でしょう。そうした共通のアイデンティティを創り出すための手段として、「ペトラルカの家」を利用したという側面が、アルフィエーリにもフォスコロにもあるように思われます。もし彼らが文部大臣であったなら、「ペトラルカの家」を重要文化財に指定し、「もって国民意識を高揚すべし」と命令したことでしょう。

西行とダンテ、ペトラルカの比較を、「3. 自己編集と伝説的様式化」という観点から続けましょう。西行はすでに触れた2つの歌合を自ら編集していますが、そのほかにも『山家心中集』を自ら編んで藤原俊成に送ったと見られています。また、『西行法師家集』にも自選秀歌集という側面があるのかもしれませんが。ダンテもペトラルカも、自選詩集の編集に深く関わった詩人でした。1290年にベアトリーチェが亡くなると、ダンテはそれまでに書き散らされていた詩片群の中から取捨選択して作品を一定の順序で配列します。そして、選ばれた作品が生まれた背景を、散文で説明しながら筋を展開させて、『キタ・ノワ』（新生）が書かれました。この「散文プラス韻文」という混合形式で書かれた作品は、ハンドアウト18)からも明らかなように、ベアトリーチェを神秘的な数9と結びつけ、神に直接由来する奇跡として伝説化しています。そして、そのような例外的存在に関わりえた「私」自身もまた、神の特別な恩寵に浴した者として伝説化されます。それゆえ、『キタ・ノワ』は歌物語的な形をとった擬似的自伝と特徴づけることができましょう。『キタ・ノワ』で伝説化された「私」は、かつてのベアトリーチェが天国の案内人となることによって、『神曲』にも受け継がれます。

『キタ・ノワ』と『西行物語』の類似には驚くべきものがあります。「歌物語的な語り」の形式が共通しているだけではありません。素材としての歌、韻文作品の活用の仕方においても、両者は似通っています。『キタ・ノワ』においても『西行物語』においても、韻文作品が実際の制作年代とは異なったクロノロジーによって配列されたり、筋の展開との関連で韻文作品には元来のとは異なった意味が付与されたりしています。たとえば、ハンドアウト19)に掲げた『西行物語』の一節では、すでに言及した歌、「遙かなる岩のはざまにひとりゐて人目思はで物思はばや」が、恋する者の心理ではなく、俗塵を遠く離れた栖に対する憧れを表現したものとして挙げられています。他方、『キタ・ノワ』第3章では、元来ベアトリーチェとは無関係なソネットが彼女の死を予告するものとして利用されているし、第23章ではベアトリーチェの死後に詠まれたカンツォーネが、やはり生前から彼女の死を予告した作品として扱われています。『キタ・ノワ』と『西行物語』が大きく異なっているのは、『西行物語』では西行本人ではない不詳の作家が実録風の伝記を構築しているのに対して、『キタ・ノワ』では韻文の作者本人である「私」、つまりダンテ本人が実録とは言い切れない自伝を構築していることでありましょう。この違いは、三人称語り/一人称語りの差異となって表われます。

ペストが猖獗をきわめた1348年、ラウラが亡くなると、ペトラルカも自選詩集の編集に本腰を入れるようになります。今日『カンツォニエーレ』の名で呼ばれているのは、通常、ペトラルカの366篇の韻文作品を含んだ最終段階の形態の詩集のことです。その編集がいかなる段階をへて進められたかについては、今は踏み込みません。むしろ、『キタ・ノワ』との比較を通じて、最終段階の『カンツォニエーレ』の特徴を掴みだしてみましょう。ペトラルカの自選詩集には、詞書に対応するものがなく、「歌物語的な語り」によっては展開しません。

それでも、『カンツォニエーレ』にはハンドアウト20) および21) に引いた作品に見られるように、カレンダー的な要素が散りばめられており、「私」とラウラの関係が時の中を動いていることが感じられます。しかし、両者の関係は一方通行のまま、まったくと言っていいほど変化しません。時折「私」は聖職者らしく神に心を向けて、ラウラへの愛を捨てようとしませんが、捨てきれず、ラウラに憧れ苦しみます。ラウラが少しやさしい態度で接してくれると、「私」は天にも昇るような幸福を味わいますが、そんな状態は長く続かず、再び悲しみに突き落とされます。「私」の心が堂々巡りしている印象は拭い難く、『カンツォニエーレ』が366、つまり閏年の日数と同じ数の作品を収録している意味も、おそらくそこにあるのでしょう。言い換えれば、『カンツォニエーレ』には2つの時、すなわち「円環的に反復される時」と「直線的に流れ去る時」が反映されており、この2つの時の間で「私」とラウラの関係は緩やかに螺旋を描きつつ進行します。それゆえ、筋の展開は微弱で感じとりにくいものではありませんが、『カンツォニエーレ』もまた自作の歌を含んだ擬似自伝的な作品です。そこでペトラルカは、「理想」と「現実」の間で迷いながら、決断に踏み切れないまま、いたずらに時に流されてゆく「私」を演出、より正確には言えば、自己演出しています。自己演出という観点からは、先に言及した「ヴァントゥー山」についての手紙にもう一度触れておかねばなりません。この手紙もやはり後年自己編集された書簡集に収録されておりますが、山頂においてたまたま開かれた『告白』の頁が、まさしく「内面に目を向けよ」と勧めていたとしています。この点については、自己演出＝虚構ではないかとの疑念が抱かれましょう。

最後に、「4. 心身分離のテーマほか」として、日伊の別を問わず見られる、テーマや発想の細かな共通点に触れておきましょう。ハンドアウトの22) から28) は「身体から遊離してゆく心・心臓」というテーマに関する西行およびペトラルカの作例です。29) の西行および30) のダンテでは、灰と化した地獄の霊が再び元にもどる場面が描かれています。

西行、ダンテおよびペトラルカの比較にむけた、私のささやかな考察が、何らかの刺激となって皆さまの研究を促進することになれば幸いです。ご静聴ありがとうございました。

## 旅する詩人の日伊比較-西行、ダンテ、ペトラルカ（ハンドアウト）

- 1) 西行：風さえて寄すればやがて氷つゝ返る波なき志賀の唐崎（山564、宮50）
  - 2) 西行：白川の関屋を月のもる影は人の心をとむるなりけり（山1126）
  - 3) 西行：都出でて逢坂越えし折までは心かすめし白川の関（山1127）
  - 4) （参考）能因：都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関
  - 5) 西行：津の国の難波の春は夢なれや蘆の枯葉に風わたる也（裳58、西96）
  - 6) （参考）能因：心あらむ人に見せばや津の国の難波わたりの春の景色を
- 7) ダンテ『神曲』（「地獄篇」第12歌4-10：地獄の第6圏と第7圏を隔てる断崖の描写）

Qual è quella ruina che nel fianco  
di qua da Trento l'Adice percosse,  
o per tremoto o per sostegno manco,  
che da cima del monte, onde si mosse,  
al piano è sì la roccia discoscesa,  
ch'alcuna via darebbe a chi sù fosse:  
cotal di quel burrato era la scesa;

トレントの手前でアーディジェ川の岸辺を襲った土砂崩れは、その原因が地震であったにせよ地盤の緩みであったにせよ、地滑りの起点となった山頂から平野にいたるまできわめて急峻な岩場となっているため、山頂にある者には「下りの」道が「辛うじて」見出される。「地獄の」あの崖をおりてゆく道もちょうどそのような道であった。

- 8) ダンテ『神曲』（「地獄篇」第31歌136-141：「私」とウェルギリウスが巨人の掌に乗って絶壁を下りる場面）

Qual pare a riguardar la Carisenda  
sotto 'l chinato, quando un nuvol vada  
sovr'essa sì, ched ella incontro penda;  
tal parve Anteo a me che stava a bada  
di vederlo chinare, e fu tal ora  
ch'i' avrei voluto ir per altra strada.

ガリゼンダ（＝ボローニャの斜塔）の上を雲が流れてゆく時に、斜面の下から仰ぎみていると、塔が自分の方に傾いてくる錯覚に陥るものだ。巨人アンタイオスは、まさにそのような感覚を私に味わわせることになった。私は巨人が身を屈めるのを見られるものと期待していたのだった。それはあまりに恐ろしい瞬間だったから、別の道を通ってゆきたいと思ったほどだった。

- 9) ダンテ『神曲』（「煉獄篇」第12歌100-108：煉獄の第1台と第2台をつなぐ階段の描写）

Come a man destra, per salire al monte  
dove siede la chiesa che soggioga  
la ben guidata sopra Rubaconte,  
si rompe del montar l'ardita foga  
per le scalee che si fero ad etade  
ch'era sicuro il quaderno e la dogia;  
così s'allenta la ripa che cade  
quivi ben ratta da l'altro girone;  
ma quinci e quindi l'alta pietra rade.

善政を施された（＝皮肉）あの街（＝フィレンツェ）を、ルバコンテ橋（＝今日のグラツィエ橋）の近くから見下ろしている（聖ミニアート）教会があつた山にはある。その山に登ろうとすると、[ある地点で] 右手側に階段が設けてあり、上り坂の険しい傾斜は緩められる（階段が造られたのは、帳簿や度量衡に不正のなかった時代のことだ！）。ちょうどそのような仕方、次の台から急傾斜で下に降りてくる崖は、険しさを和らげていた。ただ、右側でも左側でも、高い壁の石に体がこすれた。

- 10) ダンテ『神曲』（「地獄篇」第30歌62-68：贗金づくりの工匠アダーモが喉の渴きを訴える場面）

io ebbi, vivo, assai di quel ch'i' volli,  
e ora, lasso!, un gocciol d'acqua bramo.  
Li ruscelletti che d'i verdi colli  
del Casentin discendon giuso in Arno,  
faccendo i lor canali freddi e molli,  
sempre mi stanno innanzi, e non indarno,

ché l'immagine lor vie più m'asciuga

生きていた頃には、望みのものは〔何であれ〕十分に手に入った。だが、悲しいかな、今では一滴の水を渴望する身の上だ。カゼンティーノ地方（＝アルノ川上流の山岳地帯）のいくつもの小川は、水路をひんやりと湿らせながら、緑の山を下ってアルノ川に注ぎ込む。その光景がいつも目交（まな）いにかかっているが、それも徒らではない。その光景が私の渴きを一層かき立てるのだから。

11) ペトラルカ『カンツォニエーレ』57番7-8: «et corcherassi il sol là oltre ond'esce / d'un medesimo fonte Eufrate et Tigri» (ティグリス、ユーフラテスは同じ水源から湧き出す。その場所の彼方〔＝東の彼方〕に太陽は、沈むことになるだろう〔私の思いが叶うより前に〕)

12) ペトラルカ『カンツォニエーレ』35番

Solo et pensoso i più deserti campi  
vo mesurando a passi tardi et lenti,  
et gli occhi porto per fuggire intenti  
ove vestigio human la rena stampi.  
Altro schermo non trovo che mi scampi  
dal manifesto accorger de le genti,  
perché negli atti d'allegrezza spenti  
di fuor si legge com'io dentro avampi:  
    sì ch'io mi credo omai che monti et piagge  
et fiumi et selve sappian di che tempore  
sia la mia vita, ch'è celata altrui.  
Ma pur sì aspre vie né sì selvagge  
cercar non so ch'Amor non venga sempre  
ragionando con meco, et io con lui.

ただひとりもの思いに沈みながら、もっとも人気のない野原を私はゆっくりとした遅い足どりで渡ってゆく。人の足跡が地面に刻印を残している場所を避けるために、私は注意深く目を動かす。人々の鋭い眼差しから私を守ってくれる、ほかの盾を私は見つけることができない。それというのも、陽気さの消え失せた私の立ち居振舞いの中には、私が内でどんなに燃えているか、外からでも読みとることができるからだ。だから、私は今や信じて疑わない、他人には隠されているわが生がどのような性質のものなのか、山も斜面も川も森も知っている。しかしそれでも、愛が私と常に語り合いながらついて来ないような（そして私も彼と語り合いながらついてゆかないような）、それほどまでに荒涼とした険しい道を捜すことができない。

(参考) ペトラルカ『カンツォニエーレ』71番37-39: «O poggi, o valli, o fiumi, o selve, o campi, / o testimon' de la mia grave vita, / quante volte m'udiste chiamar morte!» (ああ岡よ、谷よ、川よ、森よ、野原よ、わが苦悩に満ちた生の証人たちよ。私が死を呼び求めるのを、おまえたちは何度聞いたことだろう)

13) (参考) 西行：遙かなる岩のはざまにひとりゐて人目思はで物思はばや (新古今1099)

14) ペトラルカ『親近書簡集』第4巻第1書簡(南仏マロセーヌ、1336[?]年4月26日付) 1; 26-27

Altissimum regionis huius montem, quem non immerito Ventosum vocant, hodierno die, sola videndi insignem loci altitudinem cupiditate ductus, ascendi. ... Que dum mirarer singula et nunc terrenum aliquid saperem, nunc exemplo corporis animum ad altiora subveherem, visum est michi *Confessionum* Augustini librum, caritatis tue munus, inspicere; ... Aperio, lecturus quicquid occurreret; ... Deum testor ipsumque qui aderat, quod ubi primum defixi oculos, scriptum erat: «et eunt homines admirari alta montium et ingentes fluctus maris et latissimos lapsus fluminum et oceani ambitum et giros siderum, et relinquunt se ipsos». Obstupui, fateor.

この地方の一番高い山は、ふさわしくも「風の山」、ヴァントゥー山と呼ばれていますが、その山に私は今日登りました。山の傑出した高みを見てみたいという願望が唯一、私を駆り立てた動機です。… (中略) …それらの眺望のひとつひとつに感嘆し、地上の何らかのことに分別を働かせたり、[高みに登った] 体の例にならってより高尚な事柄に心を傾けているうちに、聖アウグスティヌス『告白』を覗いてみるのがよいと思いました。親愛なるあなた（＝アウグスティヌス会修道士ディオニージ・ダ・ボルゴ・サンセポルクロ）が贈ってくださった、あの書物です。… (中略) …どこであれ、目に入ったところを読もうと思って、開きました。… (中略) …私は神を、またそこに居合わせた者（＝ともに登山した弟ゲラルド）を証人として。私が最初に目をとどめたところには、次のように記されておりました。「人々は、山の高みや巨大な潮流、広大に流れてゆく河川、大洋の広がり、星辰の軌道を驚嘆しに出かけて行く。だが、自分自身のことをなござりにしている」(＝『告白』第10巻第8章からの引用)。告白しますが、私は茫然自失しました。

15) ペトラルカ『カンツォニエーレ』234番1-4: «O cameretta che già fosti un porto / a le gravi tempeste mie diurne, / fonte se' or di lagrime nocturne, / che 'l di celate per vergogna porto» (お小部屋よ、かつては昼に私を襲う激しい嵐に対して港となってくれたおまえは、今では夜の涙で泉と化した。昼は恥ずかしくて隠しているあの涙で) [下線部はアルフィエーリによって引用され、書き出しの表現として利用される]

16) アルフィエーリ<sup>1</sup>「ペトラルカの部屋に寄せて」(ソネット)

O cameretta, che già in te chiudesti  
quel grande alla cui fama angusto è il mondo,  
quel sì gentil d'amor mastro profondo  
per cui Laura ebbe in terra onor celesti;  
o di pensier soavemente mesti  
solitario ricovero giocondo;  
di quai lagrime amare il petto inondo  
nel veder ch'oggi inonorata resti!  
Prezioso diaspro, agata ed oro  
Foran debito fregio, e appena degno  
di rivestir sì nobile tesoro.  
Ma no: tomba fregiar d'uom ch'ebbe regno  
Vuolsi, e por gemme ove disdice alloro:  
qui basta il nome di quel divo ingegno.

お小部屋よ、かつておまえはあの偉人を宿した。彼の名声は全世界をもとところ狭しと広がっている。恋愛詩のあの深遠にして高貴なる巨匠のお蔭で、ラウラは地上にありながら天上の栄光に浴した。悲しくも甘い[恋の]思いの、わびしくも楽しい隠れ家よ。今は粗末なありさまのおまえを見ると、なんとつらい涙で私は胸を濡らすことだろう。

高価な碧玉や瑪瑙、金が当然の飾りであり、このようなすばらしい宝を包むに辛うじてふさわしかろう。いや、そうではない。王国をもった人間の墓ならば飾り立て、月桂樹が似つかわしくないところには宝石を置かねばならない。だが、ここにはあの神々しいまでの才知 [をもった詩人] の名前だけで十分だ。

17) フォスコロ<sup>2</sup>『ヤコボ・オルティスの最後の手紙』(1797年11月20日付書簡から) : ペトラルカの終の住処となったアルクワの家を訪ねる主人公ヤコボ

Noi proseguimmo il nostro breve pellegrinaggio fino a che ci apparve biancheggiante da lungi  
la casetta che un tempo accoglieva  
quel Grande alla cui fama è angusto il mondo,  
per cui Laura ebbe in terra onor celesti.

ぼくらは小さな旅を続けた。やがて遠くに小さな家が白っぽく見えた。かつては、「名声を全世界にとところ狭しと広がっているあの偉人、そのお蔭で、ラウラは地上にありながら天上の栄光に浴することができた」と詠まれた人物 (=ペトラルカ) が住んだ家だ。[下線部はアルフィエーリからの引用]

18) ダンテ『キタ・ノワ』第29章(原文省略)

さて、アラビアの習慣にしたがうならば、あのご婦人 (=ベアトリーチェ) の高貴この上もない魂が旅立っていかれたのは、月の9日目の第1時のことであつた。また、シリアの習慣にしたがうならば、婦人が旅立たれたのは1年の9番目の月のことであつた。シリアでは最初の月は第1ティシュリーンであり、われわれの10月に対応するからである。さらに、われわれの習慣にしたがうならば、婦人の旅立ちはわれらの時代、すなわち主の御世の下、彼女がこの世に生まれ下りられた世紀において、完全数の10が9度満たされた年のことであつた。そして婦人は、主の御世の13番目の世紀に生きておられた。なにゆえ、この数字がこれ程までに婦人に付きしがつたのであろうか。以下がその理由の一端となりうるかもしれない。プトレマイオスおよび教会の確かな教えにしたがえば、回転する天は9つあり、天文学者たちの一致した考えによれば、それらの天は互いの関係にしたがって全体として、この地上に影響力を及ぼすとされる。それゆえ、あの数字が婦人に付きしがつたのは、彼女の誕生の際に、9つすべての天が全体として完全この上もない相互関係にあつたことを示しているのである。以上が理由の一端であるが、より精緻に無謬の真理にしたがって考えるならば、この数字 (=9) は彼女自身だつたと言えよう。私は類比的に語っているのであるが、それを以下のように理解し説明しよう。数字3を自乗すると9となることが明白であるように、それは他の数字を一切ま

1. Vittorio Alfieri (1749-1803)

2. Ugo Foscolo (1778-1827)

じえることなく、おのれ自らによって9を作りだす。ゆえに、3は9の根と呼ばれる。さて、3がおのれ自らによって9を生みだす因子であり、また、おのれ自らによって奇蹟を生みだす要因が3、すなわち3にして1なる父と子、聖霊であるとするならば、婦人に数字9が付きしがつたのは、彼女がひとつの9、すなわち奇蹟であったことを示しているのである。その根、つまり奇蹟の根源は賛嘆すべき三位一体の神にほかならない。おそらく、より精緻に考える者は、この件に関して、より精緻な理由を見出すことであろう。だが、これが私の理解する理由であり、私をもっとも好むと考えるものなのである。

19) 『西行物語』第5章34(部分)(講談社学術文庫172頁)

年頃知りたりける人のもとへ尋ね行きたりけるに、「男ははや失せにけり」とて、女房ばかり泣きみたりければ、西行出でざまに、障子に書きつけけり。

亡き跡の面影をのみ身に添へてきこそは人の恋しかるらめ [聞113]

京中も、何となく忽々なる事のみありて、心乱れければ、  
遙かなる岩の狭間に一人みて人目思はで物思はばや

20) ペトラルカ『カンツォニエーレ』62番

Padre del Ciel, dopo i perduti giorni,  
dopo le notti vaneggiando spese  
con quel fero desio ch'al cor s'accese  
mirando gli atti per mio mal sì adorni,  
piacciati omai, col tuo lume ch'io torni  
ad altra vita et a più belle imprese,  
sì ch'avendo le reti indarno tese  
il mio duro avversario se ne scorni.

Or volge, Signor mio, l'undecimo anno  
ch'i' fui somnesso al dispietato giogo  
che sopra i più soggetti è più feroce:  
*miserere* del mio non degno affanno,  
reduci i pensier' vaghi a miglior luogo;  
rammenta lor come oggi fusti in croce.

天にまします父なる神よ、優美だが、わが害(あだ)となったあの婦人(ひと)の仕草を見た時、胸のうちに、すさまじい情欲の炎が起りました。その火ゆえに、囁言(うわごと)をつぶやきつつ夜をすごし、昼をいたずらに失ない、今にいった私ですが、願わくば、汝が放つ光によって、導いてください。新しい日々の暮らしへ、称賛に値する別の企てへと。そうすれば、わが酷(むご)いあの仇敵(かたき)も、「甲斐もなく罨をはったことだ」と、虚しい思いを味わうことになるでしょう。

すなおに耐える者があれば、いっそう重くその者を苦しめる首枷よ。かの枷を首に負ったその日から、主よ、11年の月日がめぐりました。ああ憐れみたまえ、わが恥ずべき苦しみを。さまよい惑ふ思いを導いてください、よりよき目的に。十字架に汝がかけられたのは今日であることを偲ばせてください、わが迷う思いに。

21) ペトラルカ『カンツォニエーレ』212番

Beato in sogno et di languir contento,  
d'abbracciar l'ombre et seguir l'aura estiva,  
nuoto per mar che non à fondo o riva,  
solco onde, e 'n rena fondo, et scrivo in vento;  
e 'l sol vagheggio, sì ch'elli à già spento  
col suo splendor la mia virtù visiva,  
et una cerva errante et fugitiva  
caccio con un bue zoppo e 'nfermo et lento.

Cieco et stanco ad ogni altro ch'al mio danno  
il qual dì et notte palpitando cerco,  
sol Amor et madonna, et Morte, chiamo.  
Così venti anni, grave et lungo affanno,  
pur lagrime et sospiri et dolor merco:  
in tale stella presi l'ésca et l'amo.



私は、天国にいるかのような幸せな気分であらゆることに満足し、夏のそよ風を追いかけ、[虚しい] 影を抱きしめて悦に浸っている。私は、岸も底もない大海を泳いで、波に畝を作り、砂上の楼閣を築き、[流れゆく] 風に書きつけようとしている。憧憬をもって太陽を見つめると、その輝きによって私の視力は消されてしまった。逃げさまよう鹿を、私は足が不自由で、歩みが遅く不安定な牛を用いて追いかけている。目の光も消えてしまった私は、ただ自分の苦しみだけでは飽きもせず、それを夜も昼も胸を高鳴らせながら求め続け、ただ愛神とわが貴婦人、そして死を呼び求める。こんなふうには、20年間、私はただ長くつらい苦悩、涙と溜息、悲しみばかりを得てきた。こうした宿命の下、私は餌と釣針にとらえられたのだった。

↑

「夏のそよ風」(l'aura estiva) が音声的に恋人ラウラ (Laura) の名前を連想させる書き方になっている。

- 22) 西行：吉野山花の散りにし木（こ）の本にとめし心はわれを待つらん（山 1453）
- 23) 西行：うかれ出づる心は身にもかなはねばいかなりとてもいかにかはせん（山 912）
- 24) 西行：さまざまにあはれ多かる別れかな心を君が宿にとぞめて（山 927）
- 25) 西行：帰れども人のなさに慕はれて心は身にも添はずなりぬる（山 928）
- 26) 西行：月のゆく山に心を送り入れて闇なるあとの身をいかにせん（新古今、1781）
- 27) 西行 | 寂然：帰る身に添はで心のとまるかな送る思ひに代ふるなるべし（残 18）
- 28) ペトルルカ『カンツォニエーレ』129番 66-72: «Canzone, oltra quell'alpe, / là dove il ciel è più sereno et lieto, / mi rivedrai sovr'un ruscel corrente, / ove l'aura si sente / d'un fresco et odorifero laureto. / Ivi è 'l mio cor, et quella che 'l m'invola; / qui veder pòl l'immagine mia sola»（歌よ、山並みの向こうの、空がより晴朗に楽しげに輝いているところ、ある小川のほとりにて、おまえは私に再会するだろう。そこには、香しい月桂樹の若い木立からそよ風が吹いてくる。そこにこそ私の心 [心臓] はあり、私からそれを奪いとる婦人もいる。ここでは、おまえが目に見えるのは、単なる私の抜け殻だ）。

↑

『カンツォニエーレ』129番は1340年代前半に北イタリアの高原セルヴェピアーナ（レッジョ・エミリア地方）で書かれたと推定される作品。引用箇所では、詩人はその作品を恋人ラウラ (Laura) のいる南仏へと送り出している（「そよ風」l'aura が音声的に恋人の名前を連想させる書き方になっている）。イタリア語では「心」と「心臓」は同じひとつの単語 (c[u]ore) によって表わされるから、「単なる私の抜け殻」(immagine mia sola) は、「心臓」をラウラに奪いとられ、外形だけは保っているものの、死人も同然の「私」、生きている実感をもてない「私」を意味するのであろう。『カンツォニエーレ』15番、242番等も参照のこと。

- 29) 西行：塵灰（ちりはひ）に砕けはてなばさてもあらで蘇らす言の葉ぞ憂き（聞 210）
- 30) ダンテ『神曲』（「地獄篇」第24歌 97-105：窃盗の罪で罰せられている、ある霊が蛇に襲われる場面）

Ed ecco a un ch'era da nostra proda,  
s'avventò un serpente che 'l trafisse  
là dove 'l collo a le spalle s'annoda.  
Né O sì tosto mai né I si scrisse,  
com'el s'accese e arse, e cener tutto  
convenne che cascando divenisse;  
e poi che fu a terra sì distrutto,  
la polver si raccolse per sé stessa,  
e 'n quel medesimo ritornò di butto.

するとその時、私たちが立っていたところ近くにいた、ある罪人に、蛇が襲いかかり、首の付け根の部分に噛みついた。罪人はさっと燃え上がり、焼かれ、倒れ伏した時には、すっかり灰と化していた。あのようにすばやくは、OやIの文字すら書くことができなかつたろう。このように地面に砕け散ると、灰はひとりだけで集まってきて、突如としてあの同じ罪人にもどった。